

金も年を追って増加している。ユネスコの世界遺産に登録された場所では、とりわけ多くの技術的、物質的な支援がなされており、場合によっては遺産保護をより科学的に進めるための研究ラボのような基幹施設をつくるまでになっている。

現在、もっとも力を入れているのは、イタリア

軍が持ち去ったアクスムのオベリスクの返還と再建事業である。このオベリスクは当然もとの場所に再建されなければならない。次のユネスコ総会においてわれわれの提案が受け入れられ、この事業の実現のために最大限の支援をいただけると確信している。（エチオピア文化遺産庁長官）

旱魃・砂漠化とナイル川

ムーサ・モハメド・オマール

「砂漠」というとひどくロマンティックな響きをもつが、「砂漠化」といわれると逆にそら恐ろしい。みずからが存する環境の劣化を食い止めることは、人間にとって当然の務めである。サハラ以南のアフリカ諸国は、自然のままに広がる広大な土地を抱えているにもかかわらず、薪を切り出すだけの森林伐採、大規模な農園開発、さらには家畜の放牧が、土壌と樹木に多大の損失を与えていることを知らなければならない。本来、手つかずの未開発地域こそが、地球を覆う自然系の均衡を保つうえで決定的な役割を果たしているのだが、そこに住んでいる人たちは、日常生活に必要なだからと言って往々にしてその土地の環境を損ねてしまうものだ。

水は生命を持続させる。だから、豊富な水資源をもつ国は高度の発展を享受することができる。ナイル川はその水系に住む人々に多大の恩恵をもたらしてきた。世界最古の文明がこの川の周りに繁栄したのである。スーダン为例にとってみると、ナイル川は南北の国境間の2200キロにわたって流れている。近年、石油が発見されるまで、スーダンの経済は農業と遊牧民による牧畜生活が基盤であった。ハルツームの南にある青ナイルと白ナイルに挟まれたゲゼイラ平原は、ひとつの管理機構に属しているという意味では、世界でもっとも広い灌漑農場となっており、4万平方キロにわたって広がる水路のネットワークが、高低差を利用した水の流れて潤っている。ナイル川の定期的な

増水と時折の雨がこの地域の天水農業を成立させているのだ。

スーダン北部の国境地帯は、南部の多雨の赤道地帯と違って、雨もほとんど降らない。言い換えれば、この国には広大な砂漠と湿潤な湖沼地帯の両方が存在しているわけだ。スッドは世界最大の熱帯性湿地である。スーダン中央部のベルト地帯には多様な生物種が集中している。この地域では長い夏の間のみずかしの期間に雨が一気に降り、それだけで年間の400ミリから700ミリの雨量のほとんどを占める。他地域によく見られる動物の病気がないので、この地域は動物の生育に最適といえよう。スーダン西部はアフリカでも最大の地下水脈を有しているが、そこに住む部族が常に水を求めて動きまわる遊牧生活を送っているのは、いかにも逆説的である。

人間と動物の数が増してくるにともなって、スーダン西部では季節移動ルートの確保と農地の耕作をめぐる、遊牧民と農耕民の対立が発生するようになった。さらに悪いことには、気候変動の結果、1984年に大規模な旱魃が発生し、多くの動物が死に絶え、この国でも最大の人口移動を促した。この地を去った家族たちはナイル川をめざしたのである。

スーダン中央部ならびに東部の広大な平野は天水農業に適している。とはいえ、この土地の中で実際に農地として用いられているのは、すべてを合算しても3000万エーカーにしかならず、このエリアの全農耕可能地の1割にすぎない。これだけ

土地があるので、農民たちはそれまで使っていた農地を何のこだわりもなく捨てて別の場所に移ることが多い。元の場所も新しい場所も農耕の結果、表土を覆う緑地と樹林が駄目になってしまう。このような森林伐採が年間降雨量の低下を招くのである。私が小さかった頃、ハルツーム郊外では背丈ほどもある草が生えていて、そんな場所で遊んでいたことを覚えている。しかし、現在のハルツームは首都として700万人を数える人口を擁し、そのような緑はすっかりなくなってしまった。

人間が安易な生活を求めて環境破壊を行わない限りにおいて、自然はプラスの側面に働くものだ。砂漠という言葉聞いてロマンティックな感傷を抱くのは都市に住む人間だけだろう。しかし、都市生活の要求から引き起こされた自然に対するマイナスの面は、意外と認知されていない。私は青ナイルを眼の前にして生まれ育った。見渡す限り、菜園と果樹園が広がっていた。しかし今日、かつてあった緑の色は、日に日に成長する都市の要求に従って生産供給される煉瓦の赤茶色にとって代わられた。

私はかつて、スーダン建設材料開発会社の社長の職にあった。専門分野の関心が一番だったとはいえ、ナイル川の護岸については特に気にかけていた。煉瓦を製造するためには青ナイルがもたらす粘土質の土が必要で、そのため工場はいきおい川岸に立地する。結果的に、本来ならば年を追うごとに肥沃になっていくはずの川岸の土壌が損なわれていくのである。美しかった川岸が、粘土を掘り出した後の穴によって食い散らかされ、醜い地形になってしまった。

また、煉瓦を焼くためには燃料として大量の木材の消費が求められ、そのために砂漠化を防いでいた森林が切り倒されるのである。この状況にとって代わるものがあるとなれば、自然にやさしく化石燃料の消費を最小限に抑えたエネルギー利用の仕方であろう。そこで、煉瓦の製造にあたって燃料消費をいかに落とすかを研究することになった。幸い1999年になってスーダンは産油国に転じ、十分な天然ガスの供給が可能となった。環境省と民間団体の協力によって、煉瓦工場の所有者たちに天然ガスの方が安価で薪よりも良い結果をもたらすと説いて回るようになった。このようにして

ナイル川岸の土壌と自然環境の損失を減らす努力をしてきたわけである。

ところが、石油が発見されると、別のかたちの環境問題が発生した。試掘用、あるいは廃棄物処理のための穴を掘り進めるために、油田の周りの土地を確保することが求められ、木々を片端から切り倒すことになって、大規模な森林伐採が起こったのである。またパイプラインや道路の建設で河川を横断させるために自然保護区域が大幅に切り開かれてしまったのである。

人類の生存を支える天然資源の管理を行ううえで、生態系の保護は何にもまして基本となる。政府と民間団体はこの目標に向けてスクラムを組まなければならない。そこで、参考事例として、いくつかの民間団体が関わっている「田園型住宅」モデルの開発プロジェクトを挙げておきたい。

その考え方は、五種類の樹木、つまりナツメヤシ(鉱物を多く含んだきわめて甘味の果実)、ライム、ガヴァ(大量のビタミンCを含んだ果実)、ヘナ(指甲花)、羊や鶏の飼料となるだけでなく人間にとっても食用可能な果実を結ぶハーブ・ツリーを植えた川岸の住宅をモデル化し、広めていこうとするものである。実際、ナツメヤシはわずかの水分だけで育つので、スーダン北部ではどこでも植えられていて、村々の風景をかたちづくっている。これらの樹木が育つことによって砂漠の浸食から守るのである。

近年、スーダンでは環境問題をめぐって多くの法令が定められた。これまでに180に及ぶ政令や細則が発布されている。ナイル川は神の恩寵であり、その水系に住む人々はこの川を守るという、人間性にもとづく道徳的な責任を有している。何千年も前、エジプト人はナイル川の恩恵を保つために、毎年処女を生贄として捧げた。それに対して、私たちは自然と共生するというはるかにすぐれた智慧と手段を有しているのである。

確かに私たちの活動は環境に対してはわずかの影響力しか行使できないかもしれないが、人々に共通した意識を覚醒させることが何よりも重要である。砂漠も水も神からの授かりものであるが、砂漠化だけは人類が引き起こしたものであることを知らなければならない。

(前駐日スーダン大使)